

コロナ禍における保育者志望短期大学生の

メンタルヘルスに関する一考察

橋本 翼

A Study of Mental Health of Junior College Students  
Majoring in Early Childhood Care and Education  
under the Spread of Coronavirus Infection

Tsubasa Hashimoto

Abstract

The purpose of this study is to investigate mental health of Junior College students majoring in early childhood care and education under the spread of coronavirus infection.

In this study, the author uses three questionnaires as follows: “University Personality Inventory -GR Short Version(UPI-GRSV), Junior College Life Maladjustment(JCLM), and Pre-School Teacher Efficacy(PSTE), and the difference of them is analyzed in comparison among students of three years (entered in 2018, 2019, 2020). Both of students entered in 2019 and 2020 were influenced under the spread of coronavirus infection. The results are as follows: 1) Scores of UPI-GRSV of students entered in 2020 show significantly higher comparing with the scores of students entered in 2019. 2) Scores of JCLM both of students entered in 2018 and 2020 show significantly higher comparing with the scores of students entered in 2019. In Conclusion, mental support for students has to be developed under the spread of coronavirus infection.

**Key words:** mental health of Junior College students majoring in early child care and education, student life with coronavirus , the way of supporting Junior College students

## 問題と目的

著者はこれまで平山(2011)の作成したUPI(University Personality Inventory)を用いて本学の学生のメンタルヘルスの状態を把握し適切な支援方策を検討してきた[橋本・垂見(2014)、橋本・垂見(2015)、橋本(2016)]。本学保育科学生のメンタルヘルスは悪化しており入学時から卒業時までの切れ目ない支援が必要である点、さらに学生のメンタルヘルスの状態を改善するためには学生を組織的に支援する体制を整備する必要がある点について提言した。その後保育科、生活福祉情報科の学科の垣根を越えた学生のメンタルヘルス支援の組織を立ち上げ、「学生支援係」として活動を続けている。本学の学生のメンタルヘルス支援に関しては現在発展と改善の途上にあるとあってよい。小規模短期大学のメリットに、ひとりひとりの学生に目が行き届き、教員と学生の心理的距離感が近い「顔の見える」関係性が形成しやすいことが挙げられるが、本学においても学生の不調や異変を教員の側が早期にキャッチし、適切な心理的支援につなげることがある程度できていた。

しかし2020年3月よりわが国で猛威をふるい始めた新型コロナウイルス感染症の影響により、本学においても学生と対面できない日々が続いた。2020年度はオンライン授業を中心に行わざるを得ない状況が続いた。2021年度は対面授業が中心になったものの、繰り返す感染拡大と緊急事態宣言の発出により、保育科学生は一部の実習が中止・延期になるなど学生の学びの機会が制限される状況が続いている。そのため学生のメンタルヘルスの悪化や修学意欲の低下、保育者として働いていけるという自信の低下等が多くの学生に生じている可能性が危惧される。

本研究の目的は、新型コロナウイルス感染症感染拡大下における保育者志望短期大学学生のメンタルヘルスの状態を、それ以前の学生のメンタルヘルスの状態と比較し、特にどのようなメンタルヘルスの側面が悪化しているのかを明らかにすることである。本学において年二回行っている「こころと身体のアナケート」の結果をデータとして使用する。「こころと身体のアナケート」では、「UPI 短縮版5件法版(UPI-GRSV)」、「短大生活不適應感尺度」、「保育者効力感尺度」という3つの質問紙を使用して学生のメンタルヘルスの状態を把握しており、本調査においてもそれらの結果を分析対象とする。得られた結果から、今後学生のメンタルヘルス支援に必要な要因について考察を加える。本研究の仮説は以下の通りである。

- 1) コロナ禍の現在在学中の保育科2年生のUPI-GRSVの合計得点は、過去2年の卒業生の同得点と比べて有意に高い。
- 2) 現在在学中の保育科2年生の短大生活不適應感尺度の合計得点は、過去2年の卒業生の同得点と比べて有意に高い。
- 3) 現在在学中の保育科2年の保育者効力感尺度の合計得点は、過去2年の卒業生の同得点と比べて有意に低い。
- 4) コロナ禍に学生生活を送らなかった卒業生(2018年度入学生)のUPI-GRSVの合計得点および短大生活不適應感尺度の合計得点は、他の2学年度の学生の合計得点よりも有意に低く、保育者効力感尺度の合計得点は他の2学年度の学生の合計得点よりも有意に高い。

## 方法

### 1. 調査の概要

#### ・調査対象および調査時期

近畿大学九州短期大学保育科在学学生に毎年二回（4月、9月）行っている「こころと身体アンケート」に回答した学生を対象とした。年度ごとの比較を行うために、今回は2018年度入学生、2019年度入学生、2020年度入学生の3か年のデータを分析対象とした。分析に使用したデータは各学年ともに2年時4月実施のデータを用いた。データ収集の時期を2年時4月に統一した理由は以下の通りである。1) 外部実習および附属幼稚園実習を経験し、保育者になる意識が高まる反面、保育職に対する自らの適性について思い悩むこともある時期である。2) 2018年度入学生、2019年度入学生は2年4月時にほとんどの学生が附属幼稚園実習と一回目の保育実習を経験している。その一方で2020年度入学生は新型コロナウイルス感染症の影響により附属幼稚園実習を1年時に経験しておらず、半数以上の学生が1回目の保育実習が中止あるいは延期になっている。そのため、入学年度による各尺度得点の差が顕著になると予測したためである。**Table 1**にそれぞれの年度の学生が新型コロナウイルス感染症により学校生活上どのくらいの期間影響を受けたかをまとめた。

Table1 各入学年度学生の在学中における新型コロナウイルス感染症  
感染拡大の影響（2020年3月～2021年10月）

	感染流行の学生生活への影響	実習への影響
2018年度入学生	影響なし	影響なし
2019年度入学生	2年時～卒業まで（1年間）	2年外部幼稚園実習中止 2年保育実習一部中止
2020年度入学生	入学時～2021年9月末まで（1年5か月）	1年附属幼稚園実習中止 1年保育実習一部中止・延期 2年外部幼稚園実習一部中 止・延期 2年保育実習一部中止

#### ・調査内容

質問紙は以下の内容で構成されている。

##### （1） 5件法版 University Personality Inventory 短縮版（UPI-GRSV）

UPIの5件法版を作成し、信頼性と妥当性の検証を行った酒井(2015)の研究を参考にし、著者が作成した5件法版UPI短縮版(UPI-GRSV)（橋本,2017）を用いた。UPI-GRSV全30項目は、「精神身体的訴え」（「不眠がちである」等）、「抑うつ傾向」（「将来のことを心配しすぎる」等）、「対人不安」（「人に頼りすぎる」等）、「強迫傾向、被害関係念慮」（「汚れが気になって困る」等）の4つに分類される。回答は、それぞれの質問に対し、「ここ半年で」どの程度経験したかを、「いつも」、「たいてい」、「ときどき」、「少しだけ」、「全くない」の5件法で尋ねた。

##### （2） 短大生活不適應感尺度(JCLM)

保育者養成短期大学生の学生生活の不適應感を調べるために著者が作成した「短大生活不適應感尺度」（JCLM）（橋本,2017）を使用した。JCLM全20項目は、「保育者志望意欲低下」（「実習(教育実習および保育実習)に行くのが嫌だ」等）、「学修継続意志低下」（「学校に行きたくないことがある」等）、「集団帰属意識低下」（「クラスの中で誰と一緒にいたらよいかわからない」等）、「授業課題達成困難度」（「提出課題が多く、時間が足りない気がする」等）の4因子から構成されている。回答は、今の自分にどの程度あてはまるかを、「まったくあてはまらない」、「あまりあてはまらない」、「あてはまる」「かなりあてはまる」「とてもよくあてはまる」、「あてはまる」の5件法で尋ねた。

### (3). 保育者効力感尺度

三木・桜井(1998)の作成した、「保育者効力感尺度」を使用した。本尺度は全 15 項目から構成されており、信頼性、妥当性ともに保証されている。「私は、子どもにわかりやすく指導することができると思う」、「保育プログラムが急に変更された場合でも、私はそれにうまく対処できると思う」、などの項目から構成されている。それぞれの項目が現時点でどの程度あてはまるかを、「非常にそう思う」、「ややそう思う」、「どちらともいえない」、「あまりそうとは思わない」、「ほとんどそうとは思わない」の 5 件法で尋ねた。

#### 倫理的配慮

アンケート実施時に学生に調査の目的と内容に関して口頭で説明し、調査への参加は任意であること、参加しなかった場合も学生は不利益を被らないことを説明した上で調査の回答へ協力を求めた。また調査結果を論文化することに関しても同様に説明し、同意が得られた学生のみ調査協力をお願いした。

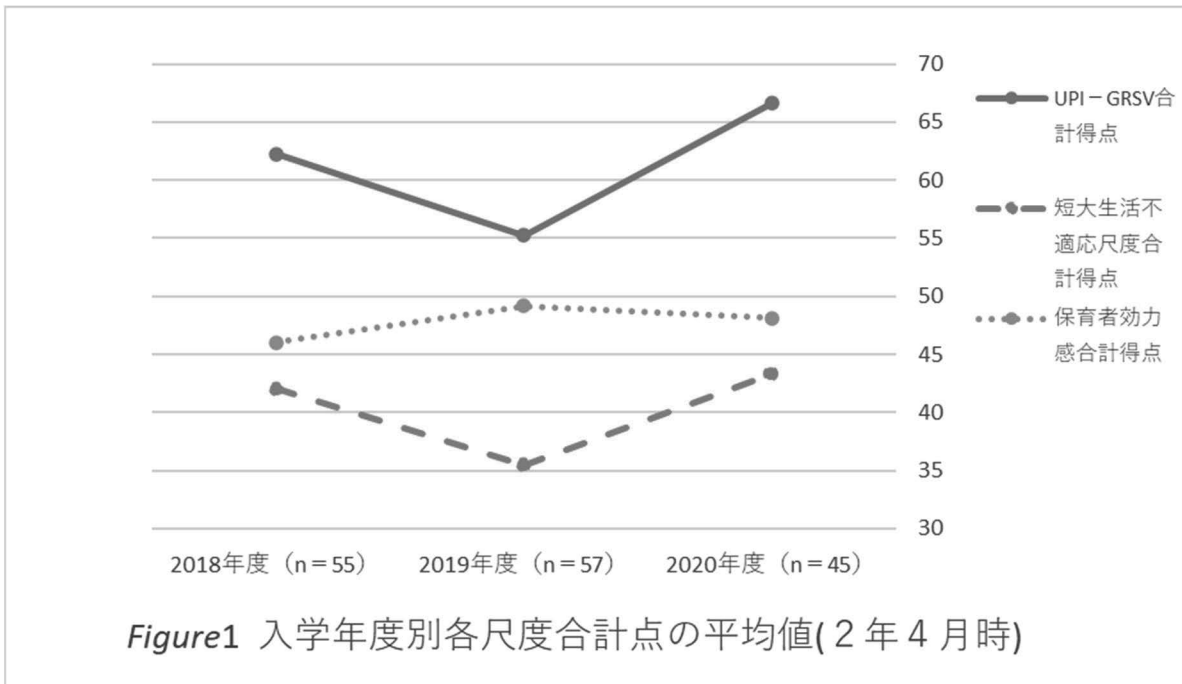
#### 分析方法

調査結果の分析は、すべて IBM SPSS Statistics(Version23)を使用した。

#### 結果

欠損値や回答の不備があったデータを分析から除外した結果、計 157 人のデータを分析の対象とした。年度ごとの内訳は、2018 年度 55 人（当時在学学生の 87%）、2019 年度 57 人（当時在学学生の 96%）、2020 年度 45 人（当時在学学生の 87%）であった。

*Figure1* に年度ごとの各尺度得点合計点の平均値を示した。UPI-GRSV 合計得点に関しては、2020 年度入学生の平均点が最も高く（66.62）、次いで 2018 年度入学生(62.25)であり、最も低いものは 2019 年度入学生(55.27)であった。短大生活不適應尺度合計点に関しては、2020 年度入学生の得点が最も高く(43.33)、次いで 2018 年度入学生(42.05)であり、最も低いものは 2019 年度入学生(35.51)であった。保育者効力感尺度合計得点に関しては、2019 年度入学生の平均点が最も高く(49.16)、次いで 2020 年度入学生（48.13）であり、最も低いものは 2018 年度入学生(46.00)であった。



次に年度ごとの各尺度間の相関係数を、Pearson の積相関係数を用いて算出し、Table 2、Table 3、Table 4 に示した。2018 年度入学生において(Table 2)は、UPI-GRSV 合計点と短大生活不適應感尺度合計点の間に有意な正の相関 ( $r=0.52, p<0.01$ ) が、短大生活不適應感尺度合計点と保育者効力感尺度合計点の間に有意な負の相関 ( $r=-0.32, p<0.05$ ) が見られた。

**Table2** 2018 年度入学生の各尺度合計点(2年4月時) における相関係数(N=55)

	UPI-GR Short Version 合計点	短大生活不適應感尺度 合計点	保育者効力感 尺度合計点
UPI-GR Short Version 合計点		0.52**	-0.18
短大生活不適應感尺 度合計点			-0.32*

\*.  $P<.05$

\*\* .  $P<.01$

続いて 2019 年度入学生においては、UPI-GRSV 合計点と短大生活不適應感尺度合計点の間に有意な正の相関 ( $r=0.62, p<0.01$ ) が、UPI-GRSV 合計点と保育者効力感尺度合計点の間に有意な負の相関 ( $r=-0.44, p<0.01$ ) が、短大生活不適應感尺度合計点と保育者効力感尺度合計点の間に有意な負の相関 ( $r=-0.60, p<0.01$ ) が見られた。

**Table3** 2019 年度入学生の各尺度合計点(2 年 4 月時) における相関係数 (N=57)

	UPI-GR Short Version 合計点	短大生活不適應感尺度 合計点	保育者効力感 尺度合計点
UPI-GR Short Version 合計点		0.62**	-0.44**
短大生活不適應感尺 度合計点			-0.60**

\*\*、  $P < .01$

さらに 2020 年度入学生においては、UPI-GRSV 合計点と短大生活不適應感尺度合計点の間に有意な正の相関 ( $r=0.55, p<0.01$ ) が、UPI-GRSV 合計点と保育者効力感尺度合計点の間に有意な負の相関 ( $r=-0.48, p<0.01$ ) が、短大生活不適應感尺度合計点と保育者効力感尺度合計点の間に有意な負の相関 ( $r=-0.52, p<0.01$ ) が見られた。

**Table4** 2020 年度入学生の各尺度合計点(2 年 4 月時) における相関係数 (N=45)

	UPI-GR Short Version 合計点	短大生活不適應感尺度 合計点	保育者効力感 尺度合計点
UPI-GR Short Version 合計点		0.55**	-0.48**
短大学活不適應感尺 度合計点			-0.52**

\*\*、  $P < .01$

これらの結果は橋本(2017)の行った先行研究の結果と一致しており、2018 年度、2019 年度、2020 年度いずれも UPI-GRSV 合計得点が高い学生ほど短大生活不適應感尺度合計点が高い傾向が見られ、短大生活不適應感尺度合計得点が高い学生ほど保育者効力感尺度合計点が高い傾向が見られることが示された。いっぽうでUPI-GRSV と保育者効力感尺度の関連においては、2019 年度と 2020 年度においてはUPI-GRSV 合計得点が高い学生ほど保育者効力感尺度合計得点が高いことが示されたが、2018 年度においては有意な相関は見られなかった。

次に、学年を独立変数とし、各尺度合計得点を従属変数とした一元配置分散分析を行っ

た結果を *Table5* に示した。まず UPI-GRSV 合計得点においては、学年の主効果が有意であり [  $F(2,154)=5.03, p<0.01$  ]、多重比較を行った結果 2019 年度入学生よりも 2020 年度入学生の得点が高い傾向にあることが示された。次に短大生活不適應感尺度合計点においては、学年の主効果が有意であり [  $F(2,154)=8.10, p<0.01$  ]、多重比較を行った結果 2019 年度入学生よりも 2018 年度入学生の得点が高く、2019 年度入学生よりも 2020 年度入学生の得点が高い傾向にあることが示された。保育者効力感尺度合計得点においては学年間で差は認められなかった [  $F(2,154)=2.18, n.s.$  ]。

以上の結果から、UPI-GRSV 合計得点に着目すると 2019 年度入学生よりも 2020 年度入学生の方が UPI-GRSV で測定されるメンタルヘルスが悪化した状態にあると結論づけることが可能である。また、短大生活不適應感尺度合計得点に着目すると、2019 年度入学生よりも 2018 年度入学生および 2020 年度入学生の得点が高く、短大生活への不適應感をより強く抱いているという結果となる。保育者効力感尺度合計点においては学年ごとの差は認められなかったことから、入学学年に伴う学生の経験の差（実習や学校生活上の制限など）以外の要因を考慮する必要がある。

**Table5 入学年度と UPI-GRSV 合計点, 短大生活不適應感尺度合計点, 保育者効力感合計点の分散分析**

	2018 年度入学生 (N=55)		2019 年度入学生 (N=57)		2020 年度入学生 (N=45)		F 値	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD		
	UPI-GR Short Version 合計点	62.25	18.03	55.77	14.46	66.62		
短大生活不適應感尺度合計点	42.05	11.08	35.51	9.4	43.33	11.96	8.10**	2019 年度入学生 < 2018 年度入学生, 2020 年度入学生
保育者効力感尺度合計点	46	6.13	49.16	8.76	48.13	9.36	2.18	

\*\* $p<.01$

## 考察

まず本研究の結果を以下に述べる。2018 年度入学生、2019 年度入学生、2020 年度入学生共に、UPI-GRSV 合計得点と短大生活不適應感尺度合計得点には有意な正の相関が認められた。同様に短大生活不適應感尺度と保育者効力感尺度の間には有意な負の相関が見られた。2019 年度と 2020 年度のみ、UPI-GRSV 合計得点と保育者効力感尺度の間には有意な



負の相関が見られた。つまり UPI-GRSV 合計得点が高い学生ほど短大生活不適應感合計得点が高く、保育者効力感が低い傾向が見られることが示された。この点は橋本(2016)の行った先行研究と一致しており、保育者志望短期大学生のメンタルヘルスを多面的に把握するために、UPI-GRSV、短大生活不適應感尺度、保育者効力感尺度の三つを用いることが有効であることが確認された。

さらに、UPI-GRSV 合計得点に関しては、2019 年度入学学生よりも 2020 年度入学学生の方が有意に高いという結果が得られ、仮説 1) は部分的に支持された。また、短大生活不適應感尺度合計点においては、2019 年度入学学生よりも 2018 年度入学学生と 2020 年度入学学生の得点が高いという結果が得られ、仮説 2) は部分的に支持された。さらに保育者効力感尺度合計得点においては学年間に差が見られず、仮説 3) は棄却された。最後に 2018 年度入学学生の UPI-GRSV 合計得点および短大生活不適應感尺度合計点に関しては、他の 2 学年よりも低くはなく、保育者効力感尺度合計点においても他の 2 学年に比べて高くはなかったため、仮説 4) は棄却された。

以上の結果をもとにコロナ禍における保育者志望短期大学生のメンタルヘルスの状態に関して考察を加える。まず 2020 年度入学学生(現 2 年生)においては、2019 年度入学学生に比べて UPI-GRSV および短大生活不適應感尺度で測定されるメンタルヘルスの状態が悪化していることが示された。表 1 に示したように、2020 年度入学学生は入学時より新型コロナウイルス感染症の影響を受け現在も学生生活を継続中である。学生の対面形式の授業(ディスカッションやグループワーク)は極力避けられ、制限の多い中で毎日の授業を受けている。さらに外部実習で直接子どもと接し、保育現場のやりがいや難しさを経験する機会も制限されている状況である。こうした状況下で、保育者になることを強く望んでいる学生ほどストレスや不安全感を強く感じ、メンタルヘルスの状態が悪化している懸念がある。いっぽうで保育者効力感が他の 2 学年度と差が見られなかった要因としては、現場に出る経験が乏しかったため自分がどれだけ保育者として通用するかという主観的な効力感と、現在の自分の力量に見合った客観的な効力感との間にずれが生じている可能性がある。分析対象が 2 年 4 月時であったという時期的な要因も保育者効力感がさほど下がっていない点に影響していると考えられる。次に 2019 年度入学学生は、2018 年度入学学生および 2020 年度入学学生よりも UPI-GRSV および短大生活不適應感尺度で測定されるメンタルヘルスの状態が良好であることが示された。2019 年度入学学生は、1 年間のみコロナ禍の影響を受けた学生生活を送っている。1 年時に附属幼稚園実習や一回目の保育実習を終えており、保育者としてのやりがいや難しさのある程度経験した上で 2 年時に進級している。そのためメンタルヘルスの状態がある程度変動しなかった学生が多数在籍していた可能性がある。またデータが 2 年 4 月時(2020 年 4 月)のものであるため、学生のメンタルヘルスにコロナ禍が与える影響はまだそれほど顕在化していなかった可能性も否定できない。最後に 2018 年度入学学生においては、2019 年度入学学生に比べて短大生活不適應感尺度合計点で測定されるメンタルヘルスの状態が悪化していることが示された。学年によりメンタルヘルスの状態には差が見られ、橋本・垂見(2015)に

よると入学時にメンタルヘルスの悪化した状態の学生は卒業時まで同様の状態が持続する傾向にあることから、2018年度入学学生のメンタルヘルスの状態は、他の2学年の学生よりも恒常的に悪化していたと考えられる。

上記の点からコロナ禍の現在(2021年度)在学中のメンタルヘルスの状態は悪化している面と、それほど深刻化・顕在化していない側面があることが示された。特に実習経験の不足が保育者志望学生のメンタルヘルスにどのように影響しているかを検討することは今後の課題である。

最後に本研究の課題について以下に述べる。まず本研究では各尺度合計点を横断的に比較したが、得点の差がコロナ禍による影響によるものか、そもそもの母集団となる学生の属性の違いによるものかが明確ではない。今後は、例えば各学年の中退率、GPI得点などの要因や、外部実習に実際に行けた回数などを把握し、それぞれの要因が各尺度得点に与える影響について分析する必要がある。さらに、新型コロナウイルス感染症感染拡大下における学生生活の現状を各学生がどのように捉えているのか(もっと対面授業で学びたいと感じているのか、あるいは対面授業が少なくなって楽であると感じているのか等)を把握し、各尺度との関連を分析することも必要と考えられる。さらに、同一学年間の各尺度得点の経年変化について縦断的に測定することも必要であろう。本研究の成果を踏まえ、今後も保育者志望短期大学生のメンタルヘルス向上に寄与する要因について検討を重ねていくとともに、コロナ禍、そしてコロナ後の時代に必要な学生支援のあり方について探求していく。

## 文献

橋本翼・垂見直樹(2014) 保育者志望学生のメンタルヘルスと支援方策の検討—近畿大学九州短期大学保育科1年生の調査から— 近畿大学九州短期大学研究紀要, **44**, 47-61

橋本翼・垂見直樹(2015) 保育者志望学生のメンタルヘルスに関する探索的研究—UPI(学生精神健康調査)と自尊感情との関連およびUPIの経時的分析を通して— 近畿大学九州短期大学研究紀要, **45**, 69 - 82

橋本翼(2016) 保育者短期大学生のメンタルヘルスに関する探索的研究(2)—UPI(学生精神健康調査)と短大生活不適応感および保育者効力感との関係— 近畿大学九州短期大学研究紀要, **46**, 31-44

平山皓/全国大学メンタルヘルス研究会(2011) 大学生のメンタルヘルス管理 UPI利用の手引き 創造出版

三木知子・桜井茂男(1998) 保育者先行短大生の保育者効力感に及ぼす教育実習の影響 教育心理学研究, **46**, 203-211

酒井渉(2015) 5件法版 University Personality Inventory の検証—主として項目反応理論を用いて— 学生相談研究, **35**(3), 218-229